7 月 4 日のメッセージ

聖書：テモテへの手紙Ⅰ　2： 1－8

「すべての人々のために」

祈りは神との対話だと言われます。確かに私たちは祈りを通して神と向き合います。自分自身と向き合います。私たちはありとあらゆることを神に祈ります。感謝、懺悔、執り成し、願望……私たちの祈りは実に多岐にわたります。もしかするとその多くは自分自身のことかもしれません。自分の目の届く範囲のことかもしれません。自分にとって益となることには懸命になる私たちですが、自分にとって益とならないことに対しては関心が薄くなってしまいます。対岸の火事とばかりに。

旧約聖書の時代から人は神に祈り続けてきました。「神よ、応えてください」と神に願い続けてきました(「僕とあなたの民イスラエルがこの所に向かって祈り求める願いを聞き届けてください。どうか、あなたのお住まいである天から耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください。」歴代誌下 6:21)。もちろん神は、人の祈りに耳を傾けておられます。自己中心的な祈りも、世界のための祈りも分け隔てなく聴いてくださいます。そして、その一つひとつに応えてくださるのです。ただし、その応え方は様々ですから、人は「願いが叶った」と喜ぶこともあれば、「願い通りではない」と憤ることもあります。それでも、神が応えてくださっているという事実に変わりはありません。

願いが叶うと人は増長します。もっと、もっとと多くを求めます。私たちは恵みを独占するばかりか、神への願いすらも独占しようとはしていないでしょうか。自分だけ良ければという思いをオブラートにくるんで、聞き心地の良い祈りをしていないでしょうか。

信仰の先達たちは自分ばかりでなく、全ての民のために祈ってきました。いつも 100%そうだったとは言いません。それでも、自分自身を神の前にさらけ出し、神の義が実現されるようにと祈ってきました(「あなたに向かって両手を広げ／渇いた大地のようなわたしの魂を／あなたに向けます。」詩編 143:6)。

情けは人のためならず。自分のことを祈ってほしいならば、まず自分が他者のために祈ることから始めなければなりません(「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」マタイによる福音書 7:12)。そして、隣人への心配りが神に見過ごされることはありません。

放っておくとすぐに自分勝手に振る舞ってしまう私たちです。だから一層、意識して他者のために、隣人のために動き、働いていくことが大切です。「そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい」(テモテへの手紙一 2:1)。